



自分の番 いのちのバトン

詩・相田みつを

自分の番

いのちのバトン

父と母で二人

父と母の両親で四人

そのまた両親で八人

こうしてかぞえてゆくと

十代前で千二十四人

二十代前では――？

なんと百万人を越すんです

過去無量の

いのちのバトンを承はっている

いまここに

自分の番を生ませている

それが

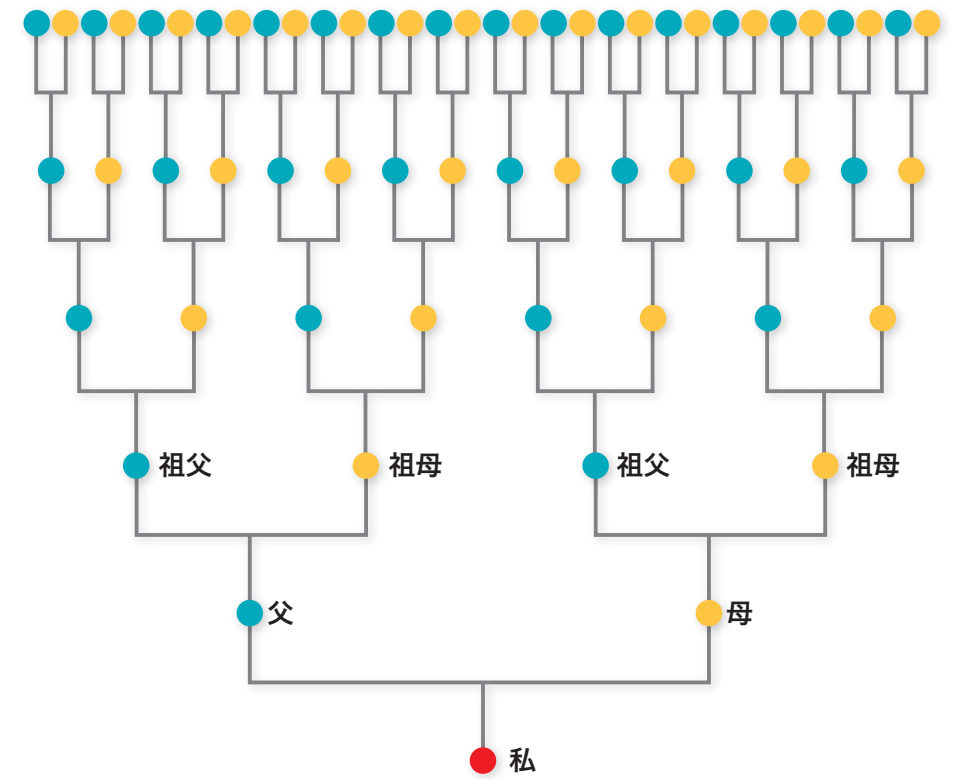
あなたのいのちです

それがわたしの

いのちです

みっを





人は誰も^{だれ}が一人で生まれてきたわけではありま
せん。
数えきれない祖先^{ちから}たちが、誰も^{だれ}もあきらめること
なく、力^{ちから}尽きることなく、つないできた「いのち
のバトン」。あなたも、それを受け継^ついでいるか
けがえのない一人なのです。

5

「いのちのバトン」に感じ
たことを見つめよう

■ 自分を見つめて考える

「自分の番 いのちのバトン」を読んで、
あなたはどのようなことを感じ、考えただ
ろう。

■ 考えを深める

「自分の番を生きている」とはどういうこ
となのだろう。

自分との対話

あなたは、どのように「自分の番」を生きたいと考
えるか。



初めての実験 山中伸弥

文・編集委員会



二〇一二（平成二十四）年十月、日本に明るいニュースがもたらされました。山中伸弥博士がノーベル生理学・医学賞を受賞したのです。山中さんが発見したiPS細胞は、「医学の未来を変える」と言われており、新しい治療法や薬の開発、病気の原因解明などが期待されています。山中さんはiPS細胞を活用するための研究を今も続けています。この大発見に至るまで、山中さんの人生にはいくつもの転機がありました。

小さい頃の山中さんは、機械をいじったり、科学の実験をしたりするのが大好きでした。あるときは、時計やラジオの仕組みを調べてみようとして分解して、元に戻せなくなってしまったことがありました。またあるときは、科学雑誌についていた実験セットを使ったら、アルコールランプを倒して、あわや火事を起こしかけたこともありました。何度もお母さんに怒られましたが、とにかく不思議なことに出会うと、それを解き明かさずにはいられない少年だったのです。

中学生になると柔道を始め、けがをしては何度も病院に通いました。どんなけがでも治してくれる

医師は、山中さんにとって憧れの存在になっていきました。

（医師になれば、医療の力で人の命を救えるんだ。多くの人の役に立てるんだ。）

次第に山中さんは、医師になることを夢見るようになりました。

やがて大学の医学部に進学し、着々と夢に向かって進んでいた山中さんですが、ようやく研修医として働き始めた頃、大きな試練が訪れます。どんなに頑張っても手術がうまくならなかったのです。

（手術を満足にこなせなければ、一人前の外科医になてなれない……。）

無力感にさいなまれ、つらい日々が続きました。

そして、もう一つ山中さんの心を痛めたのは、研修医として働く中で出会った、重いけがや病気で苦しむ患者さんたちの存在でした。その中には、骨や関節が変形してしまう病気、腕や足を切断しなければいけない病気といった、現代の医学では治すことのできないものもありました。

（今の自分では、外科医として患者を助けることなどできない。そのうえ、現代の医学では治らない病気もある。いったい、自分はどうすればいいんだ……。）

来る日も来る日も山中さんは悩み続けました。

そんな山中さんが選んだのは、医師ではなく研究者になるために大学院に入ることでした。難病で苦しむ人々を救うため、基礎医学を学ぶことにしたのです。

「今は何も分かりません。でも研究がしたいんです！ 通してください！」

大学院の面接試験で、必死に自分の思いの丈をぶつけました。すると、とにかく研究したいという思いが通じ、どうにか研究室に入れることになったのです。



＊基礎医学
人体の構造や機能について学ぶ、医学の基礎となる学問。

山中伸弥（一九六二年～）
日本の医学研究者。二〇一二年にはiPS細胞の発見でノーベル生理学・医学賞を受賞。iPS細胞は人体のあらゆる細胞に変化することができ、病気やけがで失われた体の機能を取り戻す「再生医療」に、新たな可能性を生み出した。

しかし、思い切って大学院に進んだ山中さんでしたが、正直なところ、まだ自分の将来を決めかねていました。

（この道に進んでよかったのだろうか。いつか病院に戻るほうがよいのだろうか……。）
山中さんの迷いは、まだ消えずにいたのです。

大学院に入学して半年ほどたった頃のことです。

「山中君、この実験やってみるか。」

先生が任せてくれたのは簡単な実験でしたが、初めて実験ができることに山中さんは喜びました。

その実験は、犬に薬を注射して血圧の変化を調べ、効果を検証するというものでした。

研究は、仮説を立てることから始まります。その仮説が正しいかどうか検証するために実験を行い、間違っていれば仮説を修正して再び実験を行います。研究とは、仮説と実験のくり返しなのです。

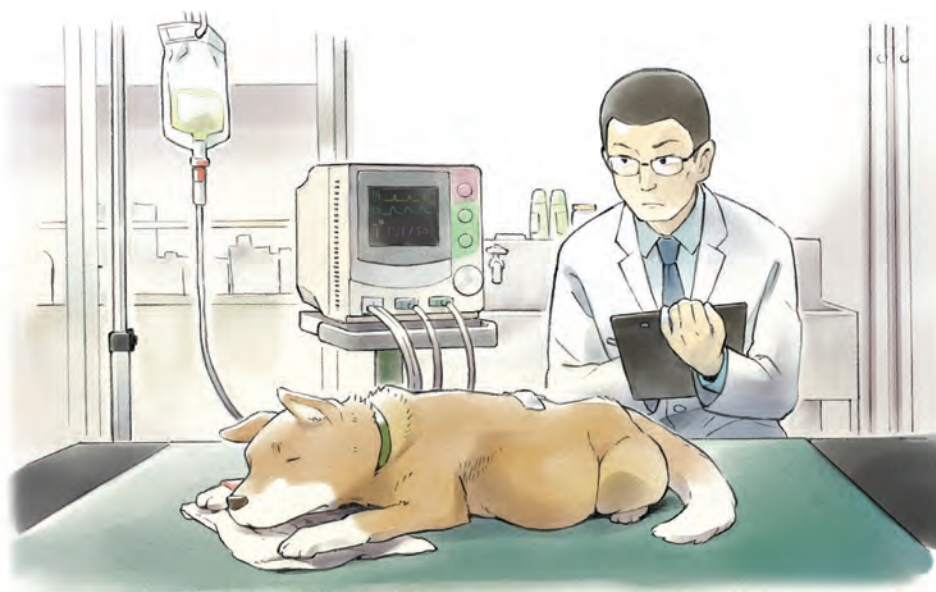
「さて、先生の仮説通りいくだろうか。」

実験を始めた山中さんは、集中して観察を続けていきます。先生の仮説では、犬の血圧は注射をする前と後で変わらないはずでした。ところが、犬の血圧は下がり始めたのです。

「なんだ、先生の仮説、当たっていないじゃないか。」

そんなことを思いながら実験の経過を記録していました。

そのときです。突然、変化が起こりました。犬の血圧が、さらに急激



に下がりはじめたのです。変化は止まることなく、このままでは犬が死んでしまうほどです。

「ええっ、なんでこんなことになってしまったんだ！」

先生の考えではむしろ、血圧が下がるのを薬が止めてくれるはずだったのです。まったく予想をしていなかった展開に、山中さんは驚きました。とにかく観察を続けるしかありません。山中さんは必死で記録を続けていきました。

一時間ほどして血圧はようやく元に戻り始めました。実験の記録を終えた山中さんは、興奮して先生の部屋へと駆け込みました。

「先生、大変なことが起こりました！ 先生の仮説とは違う結果でしたが、すごいことです！」

「自分が研究者に向いていると感じたのはこの瞬間です。」

山中さんはこのときのことを、こう振り返ります。この実験は山中さんにとって、幼い頃の「不思議なことを解き明かしたい」という思いを呼び覚ましてくれる、忘れられない体験なのです。

この「初めての実験」で起きた、仮説とはまったく違う結果。その原因を探るのが、山中さんの大学院での研究テーマとなりました。研究を続け、博士号を取得したのはそれから四年目のこと。山中さんの迷いは、もうなくなっていました。

こうして、山中さんは、研究者としての第一歩を踏み出したのです。

15

*博士号
大学院の博士課程を修了し、書いた論文が認められると得られる学位。

山中さんが初めての
実験で興奮した
理由を考えよう

■ 自分を見つめて考える

山中さんが初めての実験を通して「自分が研究者に向いている」と感じたのは、どのような自分に気づいたからだろう。

■ 考えを深める

山中さんは、どのような思いで研究者としての第一歩を踏み出したのだろう。

自分との対話

あなたの周りにも、「答えが分からないことを突きつめたり、新しいものや方法をつくったりする」人はいるだろうか。



魚の涙

文・さかなクン



中学一年生のとき、

吹奏楽部で一緒だった友人に、

誰も口を利かなくなったときがありました。

いばっていた先輩が、三年生になったとたん、

急に無視されたこともありました。⁵

突然のことで、僕にはわけが分かりませんでした。

でも、魚の世界と似ていました。

例えば、メジナという魚は、

海の中で仲よく群れて泳いでいます。

狭い水槽に一緒に入れたら、¹⁰

一匹を仲間外れにして攻撃し始めたのです。

けがをしてかわいそうで、その魚を別の水槽に入れました。

すると、残ったメジナは、他の一匹をいじめ始めました。

助け出しても、また次のいじめられっ子が出てきます。

いじめっ子を水槽から出しても、新たないじめっ子が現れます。

15

広い海の中なら、こんなことはないのに、

小さな世界に閉じ込めるとなぜかいじめが始まるのです。

同じ場所にすみ、同じ餌を食べる、同じ種類同士です。

中学時代のいじめも、小さな部活動で起きました。

僕は、いじめる子たちに「なんで？」と聞けませんでした。

でも、仲間外れにされた子とよく魚釣りに行きました。

学校から離れて海岸で一緒に糸を垂れているだけで、

その子はほっとした表情になっていました。

話を聞いてあげたり、励ましたりできなかったけれど、

誰かが隣にいただけで、安心できたのかもしれない。

10

僕は変わり者ですが、

大自然の中、大好きな魚に夢中になっていたら、

嫌なことも忘れます。

大切な友達ができる時期、

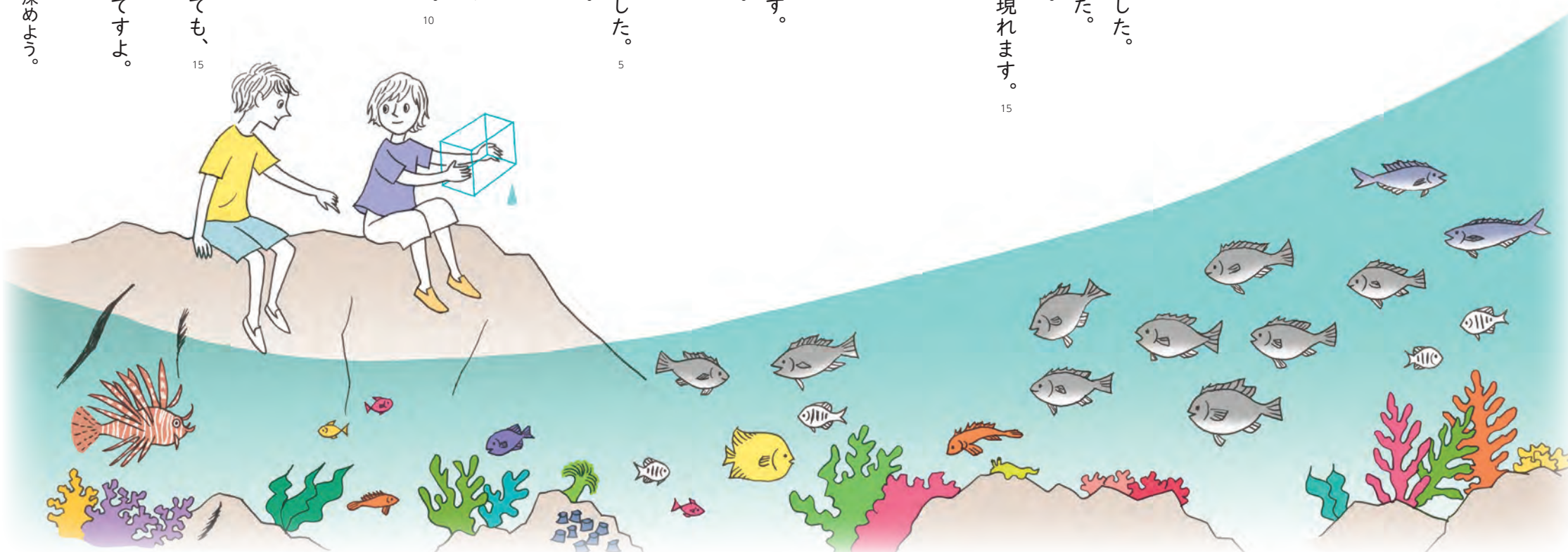
小さななかごの中で誰かをいじめたり、悩んでいたとしても、

楽しい思い出は残ります。

外には楽しいことがたくさんあるのに、もったいないですよ。

広い空の下、広い海へ出てみましょう。

↓ マイ・プラス 次のページの問いで、考えを深めよう。



いじめについて話し合ってみよう

いじめが起きるのはどうしてだろう。

また、いじめをなくすために大切にしたい心は何だろう。

「魚の涙」を読んで考えたことを話し合ってみよう。

Step 1

いじめが起きるのはどうしてだろう。
狭い閉じた世界だと起きやすいのは、
なぜだろう。

次の三つの視点で、話し合ってみよう。

- いじめている人の心の中を想像してみよう。
- いじめを見て面白がっている人の心の中を想像してみよう。
- いじめを見て見ぬふりをする人の心の中を想像してみよう。



Step 2

いじめのない世界にするために、あなたが特に大切にしたい心は何だろうか。
話し合ったことをもとに、自分の言葉で表現しよう。





バスと赤ちゃん

文・知久茂子

東京にいた、今から十六年ほど前の十二月も半ば過ぎた頃のことです。

私は体調を壊し、週二回、中野坂上の病院に通院していました。

その日は今にも雪が降りだしそうな空で、とても寒い日でした。

昼近くなって、病院の診察を終え、バス停からいつものバスに乗りました。

バスは座る席はなく、私は前方の乗降口の反対側に立っていました。車内は暖房が効いて、外の寒さを忘れるほどでした。

間もなくバスは東京医科大学前に着き、そこでは多分、病院からの帰りでしょう、どつ

と多くの人が乗り、あつという間に満員になってしまいました。

立ち並ぶ人の熱気と暖房とで、先ほどの心地よさは一度になくなってしまいました。

バスが静かに走り出したとき、後方から赤ちゃんの、火のついたような泣き声が聞こえました。

私には、人で見えませんでした。ぎゅうぎゅう詰めのバスと、人の熱気と暖房とで、小さな赤ちゃんにとって

は苦しく、泣く以外に方法がなかったのだ、と思えました。

泣き叫ぶ赤ちゃんを乗せて、バスは新宿に向かい走っていました。

バスが次の停留所に着いたとき、何人かが降り始めました。最後の人が降りるとき、後方から、「待ってください。降ります。」と若い女の人の声が聞こえました。その人は立っている人の間を、かき分けるように前の方へ進んで

きます。そのとき、私は、子どもの泣き声がだんだん近づいてくることで、泣いた赤ちゃんを抱いているお母さんだな、と分かりました。

そのお母さんが、運転手さんの横まで行き、お金を払おうとしますと、運転手さんは、「目的地はどこですか？」と聞いています。その女性は、気の毒そうに小さな声で、「新宿までなのですが、子どもが泣くので、ここで降ります。」と答えました。

すると運転手さんは、「ここから新宿駅まで歩いて行くのは、大変です。目的地まで乗って行ってください。」と、その女性に話しました。

そして急にマイクのスイッチを入れたかと思うと、「皆さん！ この若いお母さんは新宿まで行くのですが、赤ちゃんが泣いて、皆さんにご迷惑がかかるので、ここで降りると言っています。子どもは小さいときは、泣きます。赤ちゃんは泣くのが仕事です。どうぞ皆さん、少しの時間、赤ちゃんとお母さんを一緒に乗せていてください。」と言いました。私はどうしていいか分からず、たぶんみんなもそうだったと思います。ほんの何秒かが過ぎたとき、一人の拍手につられて、バスの乗客全員の拍手が返事となったのです。若いお母さんは、何度も何度も頭を下げていました。

今でもこの光景を思い出しますと、目頭が熱くなり、じいんとききます。私のとても大切な、心にしみる思い出です。



登場人物それぞれの立場から考えよう

■自分を見つめて考える

運転手さんは、どうしてお母さんに「目的地はここですか？」と聞いたのだろう。

■考えを深める

乗客全員の拍手には、どんな思いが込められていたのだろう。できるだけたくさんあげてみよう。





町内会デビュー

編・文部科学省

昼下がりの通りを、パトカーがけたたましくサイレンを鳴らして走った。十分ほどして、町の広報車が来た。
「先ほど、田中町三丁目の川沿いでクマが目撃されました。外出は控えてください。」
幸いにも人に被害はなかったが、クマの出現で町中が大騒ぎになった。

あれから一年後、またクマの出現が予想される季節になり、町内会が公民館で開かれた。クマとの遭遇への不安をなんとかしたいのだが、相手がクマでは決定的な方法があるわけではない。

「昔はこんなことはなかった。生活が変わったからかな。この間、テレビで、人間の住むところが山と直接つながったのがクマやイノシシやシカやらが出る原因だと言っていた。」

年長者の発言で、会場は妙にしんみりとなった。一呼吸のあと、町内会長が立ち上がった。

「提案ですが、人間と動物との中間地帯があるということですので、共同作業で町と山との境の草刈りと掃除を試みませんか。町内全域というのはとても無理ですが、せめて昨年クマの出た川沿いの辺りだけでも。私たちにできることは私たちでしませんか。」

町内会長の提案は採用され、緊急の回覧板が回された。今度の日曜日にいっせいの共同作業である。各家庭から一人が作業に参加するのが町内会の決まりだ。

「明、今度の日曜日の共同作業、中川家代表でお願いね。」

母の言葉に、明の夕食の箸が止まった。

「ええっ、どうして僕なの。共同作業のときは、お父さんが帰ってくるじゃない。」

「そうだけど、今度のはクマ対策ということで、臨時の特別作業なの。年間予定で分かっていれば、お父さんに赴任先から帰ってもらえるけど、今回はもう仕事が入っていて無理だって。」

「だったら、お母さんが出れば。」

「それが、その日はお母さんも仕事なの。なんとかならないかと思ったのだけど、職場の皆さんに迷惑をかけるわけにいかないし。」

「僕はまだ、中学生だよ。」

「もう中学生だから、大丈夫。申し訳ないけど、部活は休ませてもらってよ。ただの作業じゃなくて、クマ対策だから中学校のお役にも立つというものよ。感謝されてもいいくらいだよ。」

「よくそんな理屈が出てくるよ……。知らない人の中での、いやだよ。」

いくらクマのこととはいえ、大人に混じっての作業など、どのような雰囲気か想像できない。浮いてしまって居場所がなくて、おろおろしている自分の姿が目に見えぬ。

「大丈夫よ。心配しないで。皆さん、面倒見てくださるから。明の町内会デビューね。」

家の事情を思えばしかたのないことも、理屈では分かる。だが素直にうなずけない。明は黙って台所を出た。

次の日、明は改めて母から共同作業への協力を頼まれた。



「明、日曜日の作業、お願いね。中川家代表だから、逃げられないわね。」
 「逃げるって、どういうことだよ。」

明は、思わず大きな声になった。母は肩をすくめて言った。
 「ごめん、ごめん。気に障ったかしら。励ましとお願いのつもりだからね。」

日曜日がきた。母は相変わらずの調子である。

「さあ、ぼちぼち集合の時間よ。お昼はカレーを作っておいたから、温めて食べてね。私も仕事だから、そこまで一緒に行こうよ。最初の挨拶はしてあげるから。あつ、それは過保護か。」

「本気でひとごとだと思ってるだろ。」

明は、しぶしぶ腰を上げた。

集合場所になっている公民館前の駐車場に行くと、明はいきなり声をかけられた。

「おつ、中川君の息子だな、ご苦労さん。頑張ろうな。」

明は面食らって、しどろもどろの返事をした。

「ええ、はあ、そうですが……。なんて分かったんですか。」

「お父さんの同級生だよ。同級生の佐藤だよ。君は中川君とそっくりだから、すぐ分かったよ。いいなあ、君のような若い人が来てくれるのは。こっちにおいでよ。みんなに紹介するよ。」

あれよあれよという間に、明は中川家の代表だという紹介をされ、笑顔で囲まれた。

作業は、視界を妨げる立木の伐採、草刈りとごみ拾いである。念のため、クマよけの音を鳴らしている。どうしようかと戸惑っていると、五軒先の吉田さんのおばあさんが目に入った。鮮やかな手つきで鎌を操っているの、つい見とれていると、声をかけてきた。

「草刈りなんかしたことないだろう。ほら、こんなふうにしてごらん。草を握った手元の近いところに鎌を当てて、

手前に引くように……。欲張って一度にたくさん草を握ると手をけがするから、ほどほどに……。そうそう、なかなか手つきがいいよ。若い者は飲み込みが早いね。」

ほめられると元気が出る。ザクツ、ザクツといい調子で刈る。刈り取った跡が空き地のようにはつきりするので、いかにも仕事をしている気分が高まる。思わずペースが上がる。するとまた吉田さんから声がかかる。

「張り切りすぎるとバテるよ。一定の調子で、リズムよくできるくらいの力加減でやると疲れないよ。」

秋も終わりに近い季節であるが、汗が噴き出る。軍手をした手の甲で、額の汗をふく。続けていると腰も痛くなってくる。腰をトントンとたたきながらふと周りを見ると、刈り取った草を運んでいる人たちがいた。でこぼこして足元が不安定なところで足をとられそうな人もいる。

「よし。」

明は、あちこちに散らばっている切ったばかりの草や枝を集めて運び始めた。生の枝や束ねた草は思ったよりも重い。抱えて運ぶのは重労働だ。

「やあ、よく気がついたなあ。助かるわ。」

明は、確かにこの仕事は高齢者だけでは大変だと思った。

十二時を過ぎて、町内会長が作業終了をふれて回った。

「本日の作業は終了です。集まってください。」

再び集合した参加者に、町内会長がマイクを持って、お礼の挨拶をした。
 「どなたも、お疲れ様でした。おかげで作業が予定通りに終了しました。これでクマが絶対出ないというわけではありませんが、いきなりクマとぶつかる危険はずいぶん減ったと思います。今回は急なことでしたが熱心に参加していただき、うれしく思います。初めての参加の方もおられました。これを



機会にお近づきになれば、ありがたいです。クマとの出会いはいいかもしれませんが、こういう出会いは歓迎です。」

参加者には、大人にはビールとおつまみが、明にはパンとスポーツドリンクが配られた。明が帰ろうとすると、佐藤さんや吉田さんたちが寄ってきた。

「明君、今日は来てくれて、ありがとう。若い人がいると作業が早いわ。」

「そうそう。こっちまで元気になるよ。中川家代表、お疲れ様。」

明は、くすぐったかったけれど、なんだか大人になったような気持ちでした。

帰宅した明は、カレーを温めて大盛りにした。いつもの母の味だとは思いつつ、あまも、ちよつと甘いのではないかと感じてソースをたっぷりかけた。

5

翌朝、明がいつものように玄関を出ると、吉田さんが家の前を掃いていた。いつもは頭をぺこっと下げるだけの明だったが、小走りに近寄って自分から声をかけた。

10

「おはようございます。」

「あら、明君、おはよう。昨日はお疲れ様。腰が痛くならなかったかしら。」

「はい。なんとも。吉田さんこそ大丈夫ですか。」

その日、通学の途中で、明はあちこちから声をかけられた。朗らかな声でそれに応えながら、明は、背筋を伸ばして、大股で学校に向かった。

15



町内会の仕事に前向きになる明の変化を考えよう

■自分を見つめて考える

明は、「よし。」と言って草や枝を集めて運び始めたとき、どのようなことを考えていたのだろう。

■考えを深める

明が「なんだか大人になったような気持ちでした」のは、どうしてだろう。

自分との対話

地域や社会の一員として、今の自分たちにできることはないだろうか。



三六五×十四回分の ありがとう

文・柳橋佐江子

これは、重い心臓病を患っていた柳橋佐江子さんが、三度目の大きな手術の前にお母さんへ書いた手紙です。
佐江子さんは十五時間の手術のち、亡くなりました。

お母さんへ

お母さん、いよいよ三日後には手術だね。

手術を目の前にして、お母さんに言いたいことは、ただ一つ。

「十四年間、私を育ててくれてありがとう。」

心臓病をもって生まれた私を、十四年間、必死になって育ててくれてありがとう。

プールに入れないと、泣いて悔しかった私を、膝の上に乗せて、「世の中には、もっともって大変な人がいるんだよ。」と、何度も何度も言い聞かせてくれたお母さん。小学校の遠足では、「お母さんは、佐江子の足だよ。」って言いながら、私をおぶって、一緒に歩いてきてくれたお母さん。

ずっと、自転車で送り迎えをもらっていた私も、大きくなって自転車の後ろに乗れなくなったからと、車の免許まで取ったお母さん。

去年の五月の宿泊学習のときは、担任の先生や校長先生に、「一生懸命頭を下げて「どうか、一泊だけでも行かせてやってください。」って頼んで回ってくれたっけ。

いつもお風呂から出て、お母さんと一緒に飲むアイスコーヒーは、世界で一番おいしいコーヒーです。いろんなことをしゃべって、大きな声で笑い合って……。一日も早く退院して、また一緒にコーヒーを飲みたいな。

つらくて、涙が止まらないとき、黙って私の手を握ってくれるお母さんの手は、とってもあったかい。つらいことが、雪のように、どんどん解けてゆくみたい。十四歳にもなって、甘ったれだと思われるかもしれないけれど、私はお母さんのあたたかい手が大好きです。

「おやすみ。」と言い合って、布団に入るときの、お母さんの口癖。

「いい夢見なさい。」

(いい夢なんて、見ようと思って見られるものじゃないのに。変なの。)

って、ずっと思っていた。でも、入院する前の日の晩、はっと思ったの。「いい夢見なさい」は、「悪いことばっか



り考えて、めそめそしてないで、いいほうへ、いいほうへと考えなさい。明日もいいことがあるといいね」っていうことだったんだね。今、それに気づいて、私も、将来子どもが生まれたら、夜、「いい夢見なさい」と言っておきたいなと思います。

毎日、私のかばんを持って、教室まで送ってきてくれるお母さん。朝、全然知らない生徒にでも、「おはようございます！」と大きい声で挨拶してさ。

(そんなことしたら、よけい目立って恥ずかしいじゃない。)
って思ったけど、今は違います。

お母さんのそんな姿を見て育ったから、私はいつでも堂々と、胸を張って歩けるようになりました。私は病気だけど、いつも送り迎えをもらっているけど、別にいいじゃない。私はなんにも悪いことはしていないんだから。そうだよ、お母さん？

だから、今の私はとっても幸せです。登校すると、いくらお母さんが脇にいたって、「佐江ちゃん、おはよう！」と声をかけてくれる友達がいいます。休み時間に、一緒に面白い騒いでくれる友達がいいます。私のために、涙を流してくれる先生がいいます。堂々と、しっかり胸を張って、明るく生きること、私はこんなに幸せになりました。みんな、お母さんのおかげです。ありがとう。

(お母さんなんか、私の気持ち、全然分かってない！)
そう思ったことが、何度あっただろう。でも、本当はお

母さん、私の気持ち分かりすぎるくらい、分かっているんだよね。お母さんも、私と同じくらいのつらさを味わっている。手術の日が決まってから、なんとなく落ち着かず、私に、「頑張れ！」を連発していたお母さんを見て、はつきりそう思いました。

私がつらくて、悔しくて、泣きたくなるとき、お母さんもやっぱ、涙を流すまいと頑張っている。私が手術を目前にして、ちよっぴりどきどきしているとき、お母さんは、私以上に頑張っているんだよね。小学校入学以来、初めて、親の付き添いで行けた中学一年生の遠足では、お母さんもすごく喜んで、うれし涙をぼろぼろ流していたからね。「夫婦は一心同体」と、よく言うけれど、私たちは親子で一心同体だよ。

私はこの頃、病院で一人さみしくなると、「お母さんもさみしいんだ。頑張れ、頑張れ。」って、自分に言い聞かせてるんだ。

私がつらいときは、お母さんも同じようにつらい。だから私は、「手術、頑張ってくるからね。」ではなくて、「手術、頑張ろうね。」と言いたいのです。私の手術、十五時間ぐらいかかるって聞いたけど、私は大丈夫だからね、この手術が済めば、私もみんなと同じ、健康な体になれるんだもん。私もしっかり頑張るから、お母さんも頑張っ

てね。
最後にもう一度。十四年間、笑顔と根性で私を育ててくれて、本当にありがとう。今、三六五×十四回分の「あ



りがとう」を言いたい気分です。これから、もうしばらくは、お世話になるだろうけど、よろしくね。その代わり、お母さんがおばあちゃんになったらたっぶり面倒見るからね！

手術、頑張ろうね。

佐江子

柳橋佐江子さんが亡くなってから、長い年月がたちました。この手紙は、お母さんが佐江子さんへ書いたものです。



佐江子へ

さえちゃん、おはよう。お盆が終わってしまったね。

毎朝こうしてお掃除するとき、あなたとはいつもおしゃべりしているつもりだけれど、お盆の三日間は、本当にさえちゃんがうちに戻ってきているようで、お母さんは、いつからか八月が好きになりました。

もう、何度も何回もお盆が巡ってきました。

お母さんはあれから、たくさんの方の温かい心に支えられ、そしてさえちゃんの文に励ま

され、毎日を生きています。

さえちゃん。きっとあなたは知っていると思うけど、あなたには三人のおいと二人のめいがいて、みんなあなたのことが大好きです。

さえちゃん。中学二年生のときのあなたの先生とクラスメイトたちは、毎年、毎年、そして今年も、二月七日にお墓参りに行ってくれました。

その日は、あなたが十五時間の手術を頑張った日ですね。

そんな先生とお友達に、お父さんもお母さんも心から感謝しています。

さえちゃん。お盆が終わってしまったね。

あなたが言ってくれた「ありがとう」、今、お母さんがさえちゃんに言います。

ありがとう、佐江子。

母

10

5

5

佐江子さんのお母さんへの思いを想像しよう

■自分を見つめて考える

「三六五×十四回分の『ありがとう』という言葉には、佐江子さんのどのような思いが込められているのだろう。

■考えを深める

佐江子さんとお母さんの関係を、あなたはどのように思うだろう。

自分との対話

あなたは、これから家族とどのような関係を築いていきたいだろう。